

平成24年度教育事業

伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村

参加した大学生は、昔の人の生活に興味を持つ小学生たちが参加した「子どもむかし生活体験村」を運営することを通じて、自分たちが学んだ愛媛の伝承文化を伝えるとともに、リーダーの資質や子どもとのかかわり方に関して深く学び、地域に根ざして活動しようとするリーダーとして成長しました。

1. 事業実施までの経緯

本事業は、当所でのこれまでの体験活動が自然体験活動中心であったことや、日本では自然と生活文化が一体化していると思われること、今日日本の伝承文化を理解し、それを継承していこうとする意識が希薄化していること等から、自然と文化の融合体験、及び、それを通して地域に根ざして活動するリーダーを養成することを目的として、平成19年度より国立大学法人愛媛大学との共催事業として実施している。

6年目となる今年度は、前年度の課題であった、参加する大学生の意識を高めるために、愛媛大学との連携を強化して、前年度末より打合せを重ね、事業内容を早期から決定し、大学への広報に力を注ぐとともに、実施2週間前に、当所の担当者、愛媛大学の担当者、昨年度参加者を講師に、事前説明会を実施した。

小学生の参加対象は、昨年度に引き続き、4～6年生とした。小学生の広報の範囲は、愛媛県中予・南予地区全域とし、幅広い地域からの参加者を募った。これは、子どもたちが初めて出会う友人と、普段あまりできない異年齢集団での生活、遊びを経験してもらいたいと考えたためである。

内容については、昨年度は「わら」をテーマに事業を展開したが、今年度は、昔から「伊予竹」という名称で有名なように、愛媛地域の農村の周辺に生息し、人々の生活や遊びの道具として利用された「竹」をテーマとして事業を展開した。具体的には、竹トンボ、竹水鉄砲、竹馬、竹笛などの遊び道具、うちわ、竹食器、竹箸などの生活に関わる道具を製作し、実際にそれを使用する活動である。その際、製作方法や安全上の留意点、舞台となる土居家に関する知識等を、講師や惣川地区の方々から大学生が学び、小学生に伝えることとした。

以上の点を考慮しつつ、国立大学法人愛媛大学を始め、他の関係機関と連携しながら、今年度の事業を進めた。

2. ねらい

地域を大切にし、地域に根ざして活動するリーダーが求められている中で、愛媛の伝承文化を学び、先人の知恵と自然体験の融合した体験活動をすることで、地域を大切にしようとする心を育むとともに、「子どもむかし生活体験村」の運営を自ら計画し、実施することで、地域に根ざして活動しようとするリーダーを養成する。

3. 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家
国立大学法人 愛媛大学

4. 後 援 [後援] 愛媛県教育委員会 西予市教育委員会
[協力] 西予市野村町惣川「土居家」

5. 期 日 平成24年8月20日（月）～24日（金）
（子どもむかし生活体験村は8月22日（水）～24日（金））

6. 場 所 国立大洲青少年交流の家（20日（月）
西予市野村町惣川「土居家」（21日（火）～24日（金））

7. 募集人数 大学生15名
（子どもむかし生活体験村 小学校4～6年生20名）

8. 講 師

岩本康孝氏（大洲市立河辺小学校教諭）
宮本春樹氏（宇和島市立和霊小学校教諭）
犬伏武彦氏（前松山東雲短期大学特任教授）
西予市野村町惣川地区の方々
山崎哲司氏（愛媛大学教育学部教授）
日野克博氏（愛媛大学教育学部准教授）
杉林英彦氏（愛媛大学教育学部講師）
国立大洲青少年交流の家担当職員

9. 日 程

8/20 (月)	9:30	10:00	10:30	12:00	13:00	14:00	15:00	17:00	18:00	19:30	20:30
	受付	開講式	アイス ブレイク	昼 食	現代の教育	体験活動の 意義と方法	うちわ作り実習 安全管理講習	子どもとのかか わり方について	夕 入 食 浴	リーダーに ついて	情報交 換会
8/21 (火)	9:00	10:30	12:30	13:30	15:30	18:30	20:00				
	土居家へ 移動	土居家のつくりと 歴史的意義について (現地研修・講義)	昼 食	現地下見	竹細工実習 安全管理	夕 入 食 浴	リーダーズプログラム立案 「子どもむかし生活体験村」運営準備				
8/22 (水)	8:30	10:30	11:00	12:00	13:00	15:00	17:30	19:30			
	「子どもむかし生活体験村」 運営準備	開 村 式	なかまつくり ゲーム	昼 食	愛媛の民俗文化 について（土居 家を舞台に） (現地研修・講義)	うちわ作り	夕 入 食 浴	リーダーズ プログラム計画			
8/23 (木)	9:00	11:00	18:00	20:00	21:00						
	竹細工作り	リーダーズプログラム①（昼食を含む）	夕 入 食 浴	リーダーズ プログラム②	ふりかえり						
8/24 (金)	9:00	12:00	13:00	13:30	15:00	16:00	17:30				
	うどん作り 竹食器・竹箸作り	昼 食	閉 村 式	小学生帰所 大学生片付け	ふりかえり 閉講式	大学生 帰所	解散				

10. 活動内容

〈第1日【8月20日（月）】国立大洲青少年交流の家

「アイスブレイク」 国立大洲青少年交流の家職員（10：30～12：00）

参加した大学生15名の緊張をほぐすことを目的として、アイスブレイクを行った。様々な活動を行う中で、自然に笑いが生まれ、参加者同士の交流が深まった。また、22日（水）から始まる「子どもむかし生活体験村」で、小学生に「なかまづくりゲーム」を実施できるようにするためのスキルを身に付けることもできた。



「現代の教育」 国立大学法人愛媛大学 山崎哲司氏（13：00～14：00）

愛媛大学教育学部教授の山崎氏が現代の教育についての講義を行った。教員に求められる力や、「社会人基礎力」、「学士力」等についても話され、社会が大学教育に何を求めているのかを考えさせ、今後の大学教育の方向性として、アクティブ・ラーニング、ディープ・ラーニングが重要になってくることが述べられた。また、今回の教育事業は、前半部分の学習を活かして『リーダー』としての役割を担う、実践的な学習の場であることを強調された。そのためには、自分が何を学びたいかを考え、目標設定をすることが大切であり、その目標達成のための計画、事後のふりかえりの重要性について話された。大学生は、これから始まる事業の目的を明確にすることができた。

「体験活動の意義と方法」 国立大洲青少年交流の家所長（14：00～15：00）

国立大洲青少年交流の家所長が、体験活動の意義と方法について講義を行った。様々なデータを提示しながら、現代の青少年の体験活動が求められている社会的背景や、こういった取組が何に有効か等の内容で進められた。また、体験活動に関する法令の規定や体験活動を実施する上で、事故防止等の安全管理の重要性についても言及した。そして、現代の子どもたちに不足しがちな体験活動への支援ができるリーダーに成長して欲しいとの願いが述べられた。

「うちわ作り実習」 国立大洲青少年交流の家職員（15：00～16：00）

今回のテーマである「竹」に関するプログラムの一つである。22日からの「子どもむかし生活体験村」で小学生に指導ができるように、“伊予竹に土佐紙貼りてあわ（阿波）ぐれば讃岐うちわで至極（四国）涼しい”と歌い継がれているように、四国は竹や和紙、のりなどの各地の産物を使用してのうちわ生産が盛んであるという文化的背景、のり付け方法等の技術的な指導のポイントを学んだ。大学生は、小学生に直接指導できるよう、熱心に、楽しみながらうちわ製作に取り組んだ。

「安全管理講習」 国立大洲青少年交流の家職員（16：00～17：00）

翌日以降の竹細工づくり等の活動において、刃物を用いることから、刃物を使った体験活動を実施する際の安全管理についてのプログラムを設定した。どんな危険が存在するかの現状把握、それが危険であることの原因等の追究、危険を避けるための対策について考えさせた。大学生は熱心に取り組み、現地で子どもたちが安全に活動するための留意点等を実践的に考えることができ、その手応えを感じていた。



「子どもとのかかわり方について」 大洲市立河辺小学校 岩本康孝氏（17：00～18：00）

大学生が小学生を迎える前に、子どもとのかかわり方について学び、その不安を解消することがこのプログラムの目的である。河辺小学校の岩本氏から、子どものほめ方や叱り方、学級集団をまとめるためのルール作りの方法など、自身の経験に基づいた実践的な内容の講義であった。大学生にとっては、実際の教育現場で活躍している先生の話聞く貴重な機会となった。

「リーダーについて」 国立大学法人愛媛大学 日野克博氏（19：30～20：30）

最初に昨年度の参加者である愛媛大学教育学部の堀悠介氏が、自身の事業に対するねらいや、事業前後の気持ちの変化などについての経験談を語った。続いて愛媛大学の日野氏が、よいリーダーの条件、資質や能力、リーダーとしての心構えについての講義を行った。大学生は、これから、小学生を迎えるにあたって、どのようにふるまうべきか、改めて考え直すとともに、地域に根ざしたリーダーとして活躍しようとする意志を強くすることができた。

〈第2日【8月21日（火）】西予市野村町惣川『土居家』

「土居家のつくりと歴史的意義について」 犬伏武彦氏（10：30～12：30）

西日本最大級の古民家である土居家の復興に尽力された犬伏武彦氏を招き、土居家の建築構造上の特徴と、保存することの歴史的意義について講義された。大学生は、土居家の歴史的な背景について理解するとともに、この古民家で宿泊することが貴重な経験であること、また、希少な文化財としての価値について再認識し、この土居家を自らも大切に使うとともに、子どもたちにも大切に使用することを指導していくことが重要であることを深く認識することができた。



「現地地下見」（13：30～15：30）

23日のリーダーズプログラム①で『むかし遊び』等をする予定の三島神社までの道のりを実際に歩き、危険箇所の確認を行った。また、『川遊び』をする予定の三島神社水辺公園の河原に行き、危険箇所の確認と、活動範囲の確定、スローバック等による救助方法、ロープの張り方、救命救急法やAEDの使い方について学んだ。また、大学生による監視ポイントを設定した。これらの活動を通じて、子どもたちの命を守る安全管理の重要性について改めて認識し、真剣に学ぶことができた。

「竹細工実習・安全管理」惣川地区の方々（15：30～18：30）

竹を使ったプログラムとして、翌日以降に実施する「竹トンボ、竹馬、竹水鉄砲、竹笛、竹椀、竹箸」等の製作及び、それを用いた遊びに向けて、大学生は、惣川地区の方々の指導のもと、作り方やコツ、安全管理上の留意点等について学んだ。22日からの「子どもむかし生活体験村」で小学生に指導ができるように、大学生は真摯に実習に取り組み、小学生に技術を伝える手応えを感じているようであった。



「リーダーズプログラム立案」（20：00～22：00）

大学生主体で実施する「リーダーズプログラム」の立案を行った。大学生が担当するプログラムについて、各担当でその内容や運営方法について話し合った。話し合いの結果を全員の前で発表し、質疑応答をすることで内容の深化とプログラムの共通理解を図った。また、小学生を迎えるにあたって、楽しく、安全に、充実した生活ができるとともに、子どもたちのよき成長の場となるよう、『土居家の掟』を定め、リーダーとして、子どもたちに意識させるよう働きかけていくことを確認した。大学生は、いよいよ小学生を迎える時が近づき、今まで学んできた内容を再確認しながら、強い思いで団結して、立案、準備作業に励むことができた。



〈第3日【8月22日（水）】西予市野村町惣川『土居家』

「子どもむかし生活体験村」運営準備（8：30～10：30）

小学生を迎える日になり、期待と不安を胸に、大学生は小学生を迎える準備を行った。「子どもたちも期待と不安でいっぱい。私たちが笑顔で、安心させる第一印象を！」の共通認識のもと、『土居家』の清掃や小学生へのかかわり方の確認等をした。

「子どもむかし生活体験村」開始（10：30～）

「なかまづくりゲーム」（11：00～12：00）

初めて出会う者同士の緊張を和らげることを目的に「なかまづくりゲーム」を実施した。小学生が『土居家』に到着して、大学生が主導した最初のプログラムである。個人的なアイスブレイクから徐々に大きな集団にしていき、最後に全員で楽しむゲームをした。このプログラムを通じて、自己紹介も終え、最初は緊張していた小学生も、自然と会話が増え、お互いの距離が少しずつ縮まっていた。



「愛媛の民俗文化について（土居家を舞台に）」

宇和島市立和霊小学校教諭 宮本春樹氏（13：00～15：00）

宇和島市立和霊小学校の宮本氏を招き、土居家の周辺の地誌的特徴や歴史的背景、民俗文化などについての講義及びフィールドワークを実施した。宮本氏は、愛媛の民俗文化について造詣が深く、地域民俗に関する著書を多数執筆されている先生である。クイズ形式で、自然や建造物の特徴の「なぜ」に注目させ、子どもたちも大学生も、楽しみながら、愛媛の民俗文化について学ぶことができた。また、フィールドワークの際に、大学生は昨日犬伏氏から学んだことを小学生に話すなど、民俗文化について伝えることができた。



「うちわ作り」（15：00～17：30）

大学生が主導して、「うちわ作り」の技術を小学生に伝えた。効率よく活動するために、絵付けやのり付け、乾燥の場所を分ける等工夫して指導した。担当の大学生は、事前に十分な打合せをして役割分担を明確にするとともに、子どもたちの思わぬ失敗にも臨機応変に対応することができた。自分のオリジナルうちわを手にした小学生の嬉しそうな笑顔が印象的であった。



「リーダーズプログラム計画」（19：30～21：00）

小学生に秘密にしていた翌日のプログラムを、事前に一生懸命準備を行った大学生が発表した。悪天候も予想されたため、雨天時のプログラムも計画されていた。その後、班ごとに集まり、これらのプログラムを安全に楽しく実施していくために、それぞれの班の目標をたて、小学生が全員の前で発表し合った。小学生は、大学生が用意してくれたプログラムをとっても楽しみにし、翌日が待ちきれない様子であった。



〈第4日【8月23日（木）】西予市野村町惣川『土居家』及び野村少年自然の家

「竹細工作り」 惣川地区の方々（9：00～11：00）

今回のテーマである「竹」を扱ったプログラムである。惣川地区の方々の指導のもと、大学生が、21日の実習で学んだ技術や安全上の留意点を小学生に伝える形式で実施した。竹トンボ、竹水鉄砲、竹馬等の製作にあたり、刃物や、竹を曲げる際に使うバーナーの扱い方については、細心の注意を払うよう心掛け、小学生に作り方を伝えた。



「リーダーズプログラム①」（11：00～18：00）

大学生が主体的に内容を考え、運営するプログラムである。晴天時であれば神社周辺での昔遊びや川遊びを計画していたが、雷雨が予想されたことや河川増水が見込まれたため、土居家周辺及び野村少年自然の家でプログラムを実施した。まず、土居家周辺で竹を用いて水路を作った「流しそめん」で昼食をとった。その後、一班に一つ以上は竹で作った遊び道具がそろそろように竹細工製作を続け、完成後は、土居家の庭で竹トンボ飛ばしや竹馬、水鉄砲等で楽しく遊んだ。休憩時間でも夢中で遊ぶ小学生の姿や、「絶対に持って帰りたい」という思いを口にする小学生の姿など、子どもたちにとっては魅力的な遊び道具となった。



近くの野村少年自然の家の講堂に場所を変更して、『むかし遊び』と『スイカ割り』を行った。『むかし遊び』は、大学生同士の話し合いで決定した「手つなぎ鬼」「花いちもんめ」「しっぽとり」などを実施した。皆が仲よく、大きな声を出して楽しそうに遊んでいたのが印象的である。学校以外の場面で、普段あまり経験することのできない異年齢集団での遊びを一緒に楽しむことができ、小学生にとって貴重な経験になったと考えられる。『スイカ割り』は、初体験の者が多く、小学生にとって新鮮であった。周囲で見ている小学生も一生懸命声を張り上げて、仲間を応援し、スイカが割れた時には、大きな歓声があがった。どのプログラムも事前に大学生がルールを分かりやすく説明し、安全面の配慮もできていたため、充実したものとなった。



「リーダーズプログラム②」（20：00～21：00）

大学生と小学生と一緒に過ごす最後の夜には、大学生が内容を考えた『提灯行列』を実施した。和蝋燭を用い、むかしの人たちが夜に頼りにした灯りで、真っ暗な惣川の道を散策するプログラムである。参加者は、街灯が少なく暗い中、「提灯」の灯りを頼りに肩を寄せ合って夜道を歩いた。事前に下見をしたり、大学生が班の前後について歩いたりするなど、安全面にも配慮していた。



「ふりかえり」 国立大学法人愛媛大学 山崎哲司氏（21:00～22:30）

愛媛大学の山崎氏が、これまでの活動について、大学生への「ふりかえり」を実施した。これまでの活動を、自らがたてた目標に則してふりかえり、自己評価をするとともに大学生が他の仲間たちを「・・・のプロ」と相互評価していく形式で行った。大学生それぞれが、自分自身と他の仲間の長所を再認識するよいきっかけとなり、自分に自信がついたという大学生が多く見られた。

〈第5日【8月24日（金）】西予市野村町惣川『土居家』及び野村少年自然の家

「うどん作り、竹食器作り」 惣川地区の方々（9:00～12:00）

最終日は、惣川地区の方々の指導のもと、「うどん作り」と「竹食器作り」を行った。うどん作りでは、生地踏みや製麺機を使う作業を体験し、どの子どもも意欲的に活動した。竹食器作りでは、竹椀と竹箸作りに熱心に取り組んだ。自分たちで作ったうどんを、自分たちで作った食器で食べる、ということをやった小学生の顔は、達成感と成就感に満ち溢れて、おいしそうに食べていた。



「子どもむかし生活体験村」終了（～13:30）

小学生は全日程が終了し、大学生より先に帰宅する。別れる際に、小学生から大学生に感謝の気持ちを込めた歌と手紙のプレゼントがあった。小学生から大学生へ、感謝の気持ちを素直に表現したこの行為に、思わず涙ぐんでしまう者が大学生にも小学生にも少なからずもいた。大学生と小学生が、3日間の事業を通して、強い信頼関係を築いていたということを感じる瞬間であった。



「ふりかえり」 国立大学法人愛媛大学 山崎哲司氏 杉林英彦氏（15:00～16:00）

5日間の活動を振り返っての「ふりかえり」を行った。大学生が事前に立てた目標を達成できたかどうかを自己評価した。第1日目に記入したワークシートを参考にしながら振り返ることで、自分自身の変容に気がついた。また、事業を終えての感想を発表し合うことで、大学生同士の思いや考えを共有することができた。充実した5日間を送っていたということが伝わってくる時間となった。

11. 参加者の声

参加者の事後アンケートの結果

【小学生】

*満足：80.0% *やや満足：20.0% *やや不満：0.0% *不満：0.0%
○ 昔の人のすごいちえがよくわかりました。○ 友達は、あいさつ一つでなかよくなれるんだ。

【大学生】

*満足：100.0% *やや満足：0.0% *やや不満：0.0% *不満：0.0%
○楽しかったし、自分自身成長できた。○こんなに別れを惜しむと思っていなかった。

12. 成果と課題

【成果1】愛媛大学をはじめ、大学との連携が強まり、大学生の参加者が増加したこと

昨年度同様、早期から本事業を共催している愛媛大学と打合せを重ね、事業内容を早期から決定し、大学への広報に力を注ぐとともに、その結果、今年度も愛媛大学から10名の参加者があった。また、他大学の参加者についても、5名を確保することができた。過去の参加者がこの事業の良さを周りに伝えてくれていることもあり、募集人数を超える参加希望者がおり、大学の方で調整していただく等、募集定員以上の応募があった。この事業も6年目を迎え、毎回参加した大学生が成長

を実感できており、また、その感想を後輩に伝えるなどの取組が、定着しつつある。

【成果2】事前研修の充実により、事業開始時点から、参加大学生の意識を高めることができた

前年度の課題であった、参加する大学生の意識を高めるために、愛媛大学との連携を強化して、実施2週間前に、当所の担当者、愛媛大学の担当者、昨年度参加者を講師に、事前説明会を実施した。昨年度のプログラムや参加者の感想等を知ることを通じて、この事業の意義を認識し、自分なりの目標や、やってみたいプログラムの企画案を事前に練るなどの取組が見られた。時期の設定が難しく、参加者全員の参加とはならなかったが、事前説明会の参加者がコアとなって活動していた様子も認められ、今後もこの取組は続けていきたいと考える。

【成果3】参加大学生の意欲が高く、企画・運営面で大学生の主体性が早期に発揮できた

前述の、事業の認知度の広がりや事前研修の充実等により、参加した大学生は、自分なりの目標や実施したい企画案を持っている。さらに、自分が集団の中で果たすべき役割について考えて参加しており、事業の早期の段階で、企画、運営面で大学生の自主性を大いに発揮することができた。悪天候による場所の移動等、事態の変更にも大学生たちは臨機応変に対応し、充実したプログラムを企画、実施することができていた。

【成果4】IKR（生きる力）評定用紙（簡易版） 事前事後の比較

上位能力	心理的社会的能力							徳育的能力				身体的能力		
	下位能力	非依存	積極性	明朗性	交友・協調	現実肯定	視野・判断	適応行動	自己規制	自然への関心	まじめ勤勉	思いやり	日常的行動力	身体的耐性
事前	4.78	4.73	5.10	4.60	4.88	4.15	4.55	4.50	4.35	4.55	4.75	4.53	4.73	4.35
事後	5.15	5.18	5.05	4.90	4.88	4.73	5.30	4.90	4.53	5.13	4.98	4.95	5.00	4.98
差	0.38	0.45	▲0.05	0.30	0.00	0.57	0.75	0.40	0.18	0.58	0.23	0.43	0.28	0.63

本事業での体験が、小学生にどのような変化をもたらせたのかを調査するために、「IKR（生きる力）評定用紙（簡易版）」を実施した。上記の通り、多くの項目において、事業前に比べ、事業後にその数値が向上した。本事業との関連性を明確にすることはできていないが、小学生もこの事業を通して、大きく成長し、自信をつけることができたと考えている。

【課題1】「伝承文化」に関するテーマの焦点化

前述の成果に見られるように、大学生の企画運営力や子どもとふれあうことでのリーダーとしての成長は見られた一方、「伝承文化」という側面が弱かったように思われる。長く続いた事業であるために、この6年間の中で同じような「伝承文化」に関するテーマが散見される。事業の舞台となる惣川や近隣には、今まで出てきたテーマの他にも、様々な素材はあるはずである。新たな素材・テーマを模索してみたいと考える。

【課題2】リーダーとしての成長度に関する数値化と測定

大学生の成長度合いは、本年度までアンケートやふりかえり用紙、感想等、文章表記により把握してきた。成長度は従来の方法でも把握できると思われるものの、事業前と事業後の変化の内容と程度について、小学生に対するIKR評定のように測定することができれば、より成果として分かりやすくなろうと考えられる。他の事業等を参考に、測定手法を創案したいと考える。

本事業は、平成19年度から継続して実施し、今年度で6回目となる。講師の方々の熱心な指導や関係機関との連携を深めてきた結果、毎年充実した事業を展開することができている。支えてくださっている方々に感謝しながら、その関係をさらに深め、より効果的な事業を実施できるよう努力を重ねていきたい。